様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８４１４７

研究課題名（和文）コンスタンティヌス大帝研究：1700周年記念における新展開

研究課題名（英文）Recent Studies on the Achievements of Constantine the Great

研究代表者
豊田　浩志（TOYOTA, Koji）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：２０１１２１６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、コンスタンティヌス大帝の事績1700周年をめぐって、欧米で破竹の勢いで進展中の研究成果をいち早く我が国に紹介するのみならず、独自の見解を提示することにある。
　研究代表者の豊田は、312年10月28日のコンスタンティヌスとマクセンティウスの軍事対決の現場を数回踏破することによって、独自の見解を展開することができた。研究分担者の大清水はコンスタンティヌスの最後のライバル・リキニウス関連の碑文研究をおこない、黒田は堀の3Dレザー測量を活用して、開戦前夜の重要拠点Malborghettoの四面門の測量による成果を、また加藤はコンスタンティヌス関連の彫像研究で、成果をまとめつつある。

研究成果の概要（英文）：The main theme of this project is first the presentation of Western academic world on newly studies of Constantine's achievements, and some proposal of our original view points.
 Dr.Toyota could be convinced of his original view points on the military problems between Constantine and Maxentius, Dr.Oosimizu could settle a dispute about the inscription of Licinius, the last rival of Constantine. Dr.Kuroda was summing up the results of the survey on Malborghetto Quadrifrons, by the date based on Dr.Hori's support on 3D-Leser beams measurement, and Dr.Kato was putting together her paper contributed about Constantine's Iconography.

研究分野：古代ローマ史と初期キリスト教史

キーワード：コンスタンティヌス　Malborghetto　マクセンティウス　リキニウス　遺跡再利用　キリスト教図像学　３Dレザー測量

１．研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパでは 2006 年前後あたりからコンスタンティヌス大帝研究が加速度的に進展し出したことに興味を喚起され、調べてみると、彼の事績 1700 周年が経過中であることが判明した。これはコンスタンティヌス死亡年 337 年記念の 2037 年までを射程に入れた長期にわたる記念行事が予想され、実際にもこれまで「コンスタンティヌス皇帝就任」(2006 年：イギリス・ヨーク)、「対マクセンティウス戦勝利」(2012 年：イタリア・ローマ)、「いわゆる対キリスト教寛容ミラノ勅令発布」(2013 年：イタリア・ミラノ）で画期的な展覧会や国際シンポジウムが開催された。今後も 2025 年ニケーア公会議等の大行事が控えている。

(2) 我が国ではコンスタンティヌス研究に関しては 20 世紀中葉に故弓削達氏の一連の研究があったが、重要な研究対象であるにもかかわらず、その後後継研究もないことを惜しみ、再調査により学界を刺激して若手の後進育成を試みることを決心した。

２．研究の目的

(1) コンスタンティヌス大帝に関する欧米における近年の研究成果を可及的速やかに吸収、紹介する。

(2) その成果をもとにして、現地調査に基づく知見を加味し、独自の見解を提示し、速やかに邦文のみならず欧文でも公表する。

３．研究の方法

(1) 文献調査によって明らかになったコンスタンティヌスの重要事績について、これまでになく緻密な現地踏査をおこなう。

(2) 重要遺物については、空間構成と建造物への 3D レザー光線による精密測量をおこない、新知見構築に寄与する。

４．研究成果

(1) 豊田は、後 312 年におけるコンスタンティヌスのローマ進撃の道程を、とりわけ最後の軍勢停滞地 Malborghetto から最終決戦地ミルウィウス橋にいたるまで実地に辿ることにより、迎え撃つマクセンティウス軍の予想軍事拠点を明確化することができただけでなく、マクセンティウス軍内部での裏切り工作の存在の可能性についての着想をすでに公表している。それを含め、具体的に現段階で以下のような成果がえられた。

① ある文書史料によると、Malborghetto にコンスタンティヌス軍は 4 日間滞留した。数万と想定されている遠征軍が駐留するだけの空間と、それ以上に人馬のための水場の確保が可能かどうかが問題となるはずで（兵糧は、行軍途中で徴発して確保していたとして)、現地で東西南北を踏査した結果、夏場でも水の涸れていない河川が 2 カ所確認できた。とりわけ西側の流れは水量が豊かだった。

② 本科研で入手しえた 19 世紀のプロイセン軍参謀総長フォン・モルトケ Helmuth Karl Bernhard Graf von Moltke 想定の復元戦闘布陣図では、古代ローマ史研究者の一般的見解とは異なって、コンスタンティヌスとマクセンティウス両陣営は、現在の Prima Porta 遺跡（アウグストゥスの妻リウィアの別荘）よりも北側の、丘陵地帯の舌状台地上に設定されていた。平面図上では承服しがたい想定だったが、現地視察と踏破によって、舌状台地の断崖上に位置するリウィアの別荘から南方を遠望することが可能で、帝都ローマに至るマクセンティウス側のテヴェレ河沿いの守備軍配置が丸見えとなることが判明し、よってマクセンティウス軍としてはそれ以北に防御線を張る軍事的必要があったことが判明し、また舌状台地といっても数万の歩兵・騎兵が東西に展開する布陣が可能ななだらかな起伏の平原が、現在のローマ市民用の大墓地施設 Cimitero Flaminio 付近で確認され、フォン・モルトケの想定の確かさを再確認することとなった。

③ 先述の Prima Porta のリウィアの別荘付近からマクセンティウスの敗北を決定づけたミルウィウス橋までの現地踏査によって、多大な成果が得られた。それはテヴェレ河が織りなす地政学的な特異性への着眼で、フラミニア街道が走る右岸のすぐ西側には崖が切り立ち、その東の氾濫原をテヴェレ河は大きく蛇行して流れ、よって現在においても街道の道幅がごく狭い地峡が 3 カ所は確認可能であり、往事においても同様の要害が幾つか存在していたことは十分想定可能と思われる。よってそこに鞏固な防御戦を張れば、季節はすでに雨期に入り水量もあったはずので、コンスタンティヌス帝決戦兵器の重装騎兵といえども突破は容易でなかったはずだ。すなわちマクセンティウス側が数段階の厳重な防御柵で迎え撃ち、満を持し機を見て虎の子の野戦機動軍を投入すれば（付言すれば、十分な戦闘予備軍を待機させる場所も、テヴェル河の蛇行によって数カ所確保可能だった)、コンスタンティヌス軍を敗走に追い込むことも十分可能であった。要するにマクセンティウス側にも野戦での勝機は十分にあった。それを地政学的特異性が保証していたことが、今回の調査によって判明したわけである。さらにマクセンティウスが無事ローマ城壁内に引き返すことに成功しておれば、当初の予定通り籠城戦で十分対抗可能だったはずだった。

以上のような、現地踏査により新知見を獲得できたことにより、欧米の研究者も未踏の、今般の科研研究における最大の成果を得ることができたと自負するところである。

(2) 大清水は、コンスタンティヌスの最後のライバルのリキニウス帝に関する従来の研究が不十分であることに注目し、とりわけ碑文研究によって、一石を投じる論考を公表した。

(3) 黒田は、堀の支援により、Malborghtto に遺存するコンスタンティヌス創建と目される四面門の３D レザー光線による精密測量を実施し、その原型を明らかにするとともに、中世から近世におけるその再利用（最終的には農業用倉庫）のプロセス解明をめざし、現在データ処理中である。

(4) 加藤は、とりわけコンスタンティヌス時代の彫像の特徴に関する研究に従事し、その成果を近々発表予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）

(1) 豊田　浩志「裏切り者は誰だ！：コンスタンティヌス勝利のゲスな真実」『地中海学会月報』389,2016,p.4.査読無し

(2) 豊田　浩志（代表：13 人中１番目）「アウレリウス・ウィクトル『皇帝列伝』翻訳(1)」『上智史学』60,2015,pp.67-93.査読なし

(3) 大清水　裕「リキニウス統治下のドナウ川流域諸州と軍隊」『滋賀大学教育学部紀要』64,2015,pp.83-94.査読なし

(4) 大清水　裕「研究動向：1700 周年に見るコンスタンティヌス研究の展開」『地中海学研究』38,2015,pp.91-111.査読有り

(5) 加藤　磨珠枝「新刊紹介：Ed.by Rosamond Mckittrick et al.,Old Saint Peter's,Rome,*British School at Rome Studies*」『西洋中世研究』7,2015,p.189.査読なし

(6) Taisuke KURODA, Yokohama: Regeneration and Requaliffication of the Historical Urban Tissue of the Old Port City, Historic Towns between East and West,*ERMES*, 1,2015,pp.329-337.査読有り

(7) 豊田　浩志・加藤　磨珠枝・藤井　慈子「第 16 回キリスト教考古学学会国際大会参加記」『ソフィア』61-1,2014,pp.53-61.査読なし

(8) 加藤　磨珠枝「新刊紹介：a cura di Robert CASANELLI,Emilia STOLFI, *Gersalemme a Roma:La basilica di Santa Croce e le relique della Passione*」『西洋中世研究』6, 2014, pp.222-223.査読なし

(9)堀　賀貴「オスティア，ミューズの家におけるモザイク壁体配置と空間構成オスティア・ローマ都市研究 II」『日本建築学会計画系論文集』79-705,2014,pp.2563-70.査読有り

(10) Yoshiki HORI & Osasmu AJIOKA, Application of SFM and Laser Scanning Technology to the Description of Mosaics Piece by Piece, *ISPRS Technical Commission V Symposium*,40-5,2014,pp.23- 28.査読有り

(11) 大清水　裕「碑文に見るコンスタンティヌス治世のローマ帝国」『地中海学会月報』375,2014,p.4.査読なし

(12) 豊田　浩志（代表：9 人中１番目「エウトロピウス『首都創建以来の略史』翻訳(第十巻)」『上智史学』59,2014,pp.165-184.査読なし

〔学会発表〕（計 2 件）

(1) Masue KATO, Church Decoration and Relic Translation in Early Medieval Rome, Leeds International Medieval Congress, 2016/7-4-7/7, Oxford (England)

(2)Taisuke KURODA, Materials techniques restration for architectural heritage reusing, 2015/5/15, Perugia (Italia)

〔図書〕（計 3 件）

(1) 豊田　浩志編『モノとヒトの新史料学：古代地中海世界と前近代メディア』勉誠出版, 2016 年,Pp.259(豊田　浩志「記念建造物の読み方：コンスタンティヌス帝の二大建造物をめぐって」pp.72-92；大清水　裕「石に刻まれたメッセージ：古代ローマの凱旋門とラテン語碑文」pp.93-107；堀　賀貴・味岡　収「リバースエンジニアリングとしての建築史学：考古学と建築学のあいだで」pp.144-158)

(2) Yoshiki HORI and L.Lavan,Ed.by L. Lavan & M.Mulryan, *Field Methods and Post-Excavation Techniques in Late Antique Archaeology*,688,2015,pp.595-660.

(3) 加藤　磨珠枝編著『教皇庁と美術』竹林舎,2015,Pp.422（5-21,105-126,405-6）.

〔その他〕

ホームページ等

(1) 豊田　浩志「裏切り者は誰だ！：コンスタンティヌス勝利のゲスな真実」2016/4
http://www.collegium-mediterr.org/report/2016%e5%b9%b44%e6%9c%88%ef%bc%8c389%e5%8f%b7/

(2) 豊田　浩志「記念建造物の読み方：コンスタンティヌス帝の二大建造物をめぐって」2015/8/17
http://pweb.sophia.ac.jp/k-toyota/atelier/constantinus_const.pdf

(3) 豊田　浩志「余滴　コンスタンティヌス大帝 1700 周年記念関連貨幣・切手資料紹介：今年は何の年？」2014/6/11
http://pweb.sophia.ac.jp/k-toyota/atelier/constantinus_1700.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

豊田　浩志（TOYOTA, Koji）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：２０１１２１６２

(2)研究分担者

堀　賀貴（HORI, Yoshiki）
九州大学・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：２０２９４６５５

加藤　磨珠枝（KATO, Masue）

立教大学・文学部・教授
研究者番号：４０４２２５２１

黒田　泰介（KURODA, Taisuke）
関東学院大学・建築・環境学部・教授
研究者番号：７０３２９２０９

大清水　裕（OSHIMIZU, Yutaka）
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：７０６３１５７１